



毎月十五日発行 所 宗像大社 社 宗像大社 電話 0811-35 福岡県宗像市高町 電話 08106 1311 代 定価 一年送料共 1000円

神具 装束 結婚式用品 九州店 本社 福岡市博多区東園二丁目一八八二 電話 福岡(093) 六六一九四五六番 京都市中京区西三条八丁目一三〇三 電話 京都(075) 三四三三三三番

宗像大社この一年

新らしき年を前に 十二月三十一日、大祓式・除夜祭



皇太子殿下・同妃殿下御参拝

十五日、木々も新緑、陽光輝く神苑に、皇太子殿下・同妃殿下が御参拝されました。「宗像大社は皇祖天照大神より、国家鎮護皇室守護の神として神勅を奉じて御鎮座になられ、皇室とは遠き古代より格別に御関係が深い古社であり、往古より広く尊崇を集め度々勅使が参向し、歴代皇室の御崇敬も極めて厚いお社であります。」

十一月、菊花香の中、明治宮記念祭、新嘗祭が斎行され、境内では一日より十九日まで西日本一と称される菊花展が開催されました。七五三の時期と重なって、着飾った幼子等多くの参拝者で賑わった。同時に、剣道大会、吟詠大会、柔道大会、短歌大会、囲碁大会、盆裁展などの各種賑行事が盛大に行なわれた。特に剣道大会は、福岡県剣道連盟宗像支部創立三周年にあたって、各種の記念行事が盛大に行なわれた。



午前零時、浄暗の中、本殿の大太鼓の一鼓によって神門が開かれた。昭和五十八年が始まったのだ。



四月、一日、二日春季大祭。二十九日には天長祭。また海を渡って前大島中津宮では二十六、二十七日沖津宮・中津宮両宮春季大祭斎行。



五月、五日は、月祭。式・夏越祭が斎行され、茅



十月、一日より三日まで秋季大祭。宗像七浦の漁船を中心とした約五百隻の船団の海上神幸はまことに壮観であった。



十二月、十二日は大島御獄の竣功式、また十五日

七五三と菊花展

◇御案内◇ 年越の大祓式並除夜祭

時下益々御清栄のこととお慶び申し上げます。このお祭り、皆様の心身の罪・穢を人形に託して払い除き、新たな清々しい気持ちで日々の生活を安らかに過ごしていただけますようお願いをこめたお祭りです。

お送り致しました紅白の人形にそれぞれ息を吹きかけ、御初穂料をそえられ、十二月三十一日迄に到着するよう御送付下さい。

宗像大社宮司 葦津嘉之
除夜祭斎行
一、一月一日・十日 新年交通安全大祈願祭
一、十二月三十一日 午後五時大祓神事、引続き除夜祭斎行

一月祭典案内

◇辺津宮
一日 元日祭 午前八時
二日 新年祭・産業文化振興祭 午前九時
三日 新年祭・家内安全祈願祭 午前九時
十日 恵比須祭 午前十時
十三日 献米奉告祭並鏡開き 午前十一時
十五日 成人祭 午前十時

◇中津宮
一日 元日祭 午前七時
二日 成人祭 午前十一時
三日 元始祭・大漁祈願祭 午前十一時
十五日 月次祭 午前十二時
十五日 月次祭

◇沖津宮
一日 元日祭
三日 元始祭
十五日 月次祭

◇お知らせ◇ 古いお札について

皆様のお札は、本殿に納められ、古札納所を設けてお預りしております。これを古札としてお納め下さい。又、交通安全のお守りも同様です。この古札は、新年の十二日、古札祭りを斎行の後当社境内にて焼納させていただきます。

第二九回 宗像大社歌会詠草

津屋崎 内田 久美
神風伊勢のみ川さざ波に模したる赤福味もうれしき
吉留 高山 信子
茶碗蒸しも手にだきて小走り娘の家にゆく小きき
八幡西 磯谷 緑雨
吹き盛かる菊惜し気なく剪りて活く限なく晴れし今日文化の日
鐘 岩瀬 辰夫
裏庭を朝掃き居れば孫の部屋時計のベルが鳴り初めけり
原 町 塩川ハルコ
さくさくと鎌で刈り居し稲株を薙ぎ倒しゆく風情なき刈り機
原 町 八波 五月
着ぶくれて茶飲みる夫の背に心鬼に禁煙を云ふ
福間 木梨まじの
戦時下に陛下の御前農の賞を受けたる従兄老いたり
福間 二宮 末子
小雨降る蜜柑畑は肌寒く心は春の日我等保護司は
武 丸 原田まつ代
階段を登りをりをする陸橋も老し身今ははかなくなりぬ
王 丸 村山 菊代
薬を焼く陣刈田にひるがりて低くおりたり雲につづける
田 久 立花 勇雄
からすうり極の細枝に四五垂りて揺れおり秋風の中を
吉留 白木うめ乃
電燈のスイッチの紐をたくし上げ蜘蛛が巣を張る一夜のうちに
古賀 吉武 邦夫
草を喰む牛もまばらに阿蘇の野は十一月の風清みわた
霧晴れて博多を望み汗流し若杉塙上へ仰ぐ
日の里 原田 里美
風おちし団地の庭に夫婦らに打つ球の音ははじけて徹る
大島 本田よしえ
光りつつ響ひくる波がけ進む連絡船の甲板に立つ
大島 大島 勝代
訪中の土産話に顔ちかへる大連の家若き日のこと
大島 目原 節子
嫁ぐ日の近づきたれば惜しまるる今日一日を娘と語りあふ
大島 佐藤 八郎
空澄みてモズの音高くこだまする御嶽の山に肌うす寒し
大島 藤田よし子
陸橋を覆ひし雉の色あせて浜に入りのあたたく射す
大島 豊福 猪走
盛り過ぎた花散りしる我が庭に背の低き菊咲き初めてをり
大島 目原 孝子
傾きし午後の日差の届く時セラニウムの花赤く輝くみゆく
津屋崎 谷口 礼子
うわねと高原登る吾がバスを谷より霧は追いつ越して消ゆ
大島 田志 雅子
吾がめぐりて昏れてゆきつつ裏庭の桐の大葉に入つ日映ゆる
大島 屋形とみえ
ナナカマドの極るばかり燃ゆる紅目にしてみゆる黒野平は
八幡西 安川 浄生
九州を離れて果てし海女の墓そのおほよそは吾れの門が命思ふ
武 丸 立石ろせ乃
夫渡きて雑事に追はるる日々なれどあど如何ほどのわが命思ふ
津屋崎 高田マサ子
亡き姉の紡ぎ織りしこの衣を尊きものに今年も織いぬ
東郷 藤崎 辰子
海底の歩道の端を流れる水あり指に舐めてみたりぬ

徳重 石松と寿子
襦り入れにはつみし機械の音たえて刈田に雀むれて遊べり
福間 広渡一寿軒
餅を撒けば見ゆか聞こゆか四方より競い寄り来る錦鯉の美し
田熊 鷺津かつ代
結びたる球のいくつが輝きてキャベツの畑に秋陽あまわし
池田 永富 謙
ながからの老いの面を見てるたり菊の香りのこもれる部屋に
福間 藤田 肇
様々の草花ありて旅楽し駅小供会の立札のたつ
福間 古賀 文月
薄くく茂りおたりる我が庭も勇定おへて秋日さし入る
田熊 丸九 一郎
飛騨路なる出で湯にひと月すこす間を山の紅葉の色深みゆく
津屋崎 谷口 礼子
日の丸の旗あぐる日は思ひらくよくぞ日の木に生れたりしと
自由ヶ丘 後藤君代
つつがなく九十七年生きし母吾のよりにとに思ふこのごろ
田 久 小方 実
男尊女卑の明治十六年の祖母の名は祖父の妻とのみ位牌にありぬ
武 丸 立石ろせ乃
夫渡きて雑事に追はるる日々なれどあど如何ほどのわが命思ふ
津屋崎 高田マサ子
亡き姉の紡ぎ織りしこの衣を尊きものに今年も織いぬ
東郷 藤崎 辰子
海底の歩道の端を流れる水あり指に舐めてみたりぬ

宗像大社歌会 俳句作品集(五)

八幡西 磯谷 緑雨
玻璃越しの秋陽溜りや老いの幸

鐘崎 岩瀬 辰夫
大漁の浜に鳥賊干す日和哉

福岡 二宮 末子
維新の土此処で生れし萩城

下 田 熊 安部 ゆき
わが影を曳きて家路に暮の秋

香 椎 板天クニコ
冬の月静にきけば終列車

東京 白木 静江
薬塚のすしりしりと並びたり

福岡 広渡一寿軒
通夜堂にころ寝惚ぶや神無月

田 熊 力丸 一郎
残菊や老いるに託すもの欲し

福岡西 入江 柳
秋夜長澄める月しろいつまでも

藤 沢 井上 玄洋
土牢の暗き歴史や山紅葉

津屋崎 井浦 良介
初春の緑側の鳥餌をついばむ

第二十九回
**宗像大社
歌会詠草**

宮田 片山 潮子
平安に生きる証しよ難路の駅のベンチにしほし身をおく

津 丸 松尾 豊
生き遺るのみが幸かやクラスメイト大方は七十年を越し

福岡 中村 勇
プロレスの切符に添へて梨と蜜柑裏口に置き娘は帰りに

東 郷 田中 春子
花終へし百日草の下陰に水仙のみどり芽吹きてあたり

香 椎 桜井 ツ子
竹は梢重く垂れたる曇り日にほととぎす遠く啼きすぎたり

原 町 中村 幸
群鳥につかず離れず移りゆく一羽の翼白く光れる

福岡 山本 夏枝
露けくもなりたる朝を葉蘇の花ほのかに白く散り敷きてをり

深 田 中野 節子
黒き帯残すもありて朝空にこまかに透けり柿の枝々

田 野 田浦タキ子
夜風に時雨ることく椎の木の宿の朝はすがし鶏の精一杯の鳴き声に明く

田 野 山口 和江
山若き日の祥の紅の色あわし始のしきせの作業衣ありて

池 田 占部ユキ子
紅葉狩りの孫は息よりも甘く見て吾のみに云うお痛におんぶと

神 湊 葉山 道子
吾に似て病むかまきりが椿色に秋陽ぬくとき敵を這いゆく

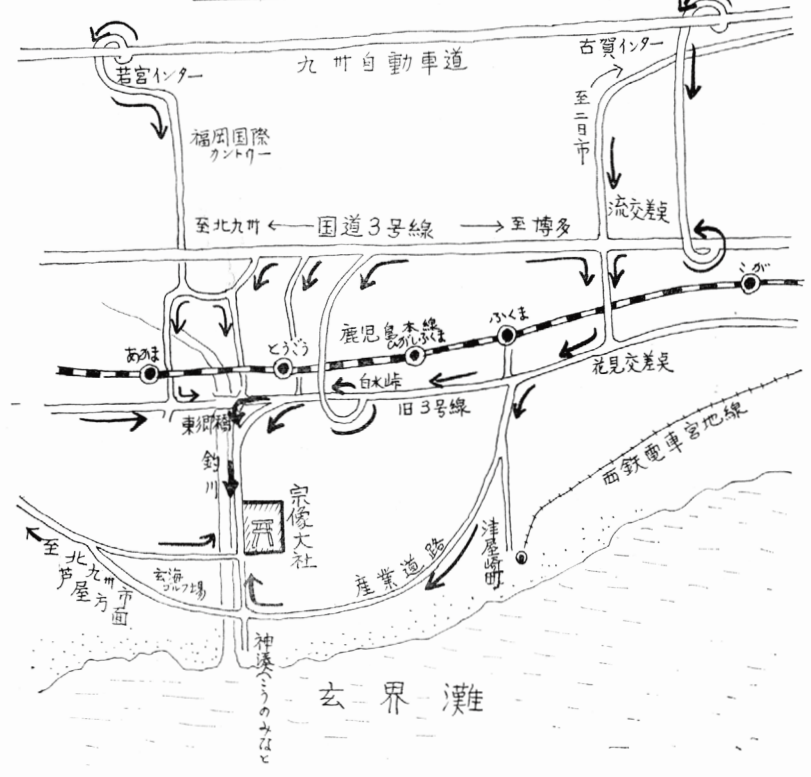
田 久 加来 幸夫
朝漢けし沢庵漬の樽にはや汁上りきぬ大根の香の

上 八 占部 元子
朝漢けし沢庵漬の樽にはや汁上りきぬ大根の香の

大 井 吉田 和子
美術館出て来しわれの靴の音ききつら空の青きを見上る

須 恵 早川 フサ
小春日の昼一人して舟中に坐れば水際の香を匂ひ来る

宗像大社 正月参拝案内図



沖ノ島・特別地区となる

永い年月を経て、宗像大社神信仰の原点を究明していった調査も、昭和四十六年の沖ノ島祭祀遺跡の調査終了をもって完了した。

昭和四十六年四月二十二日、宗像大社沖津宮・中津宮・辺津宮、三宮の境内地全域は「史跡」の指定を受けた。(文部省告示第一一九号・官報・復興期成会記録) 次いで、昭和四十七年三月三十日まで、境内地全域には、史跡境界線を明確にする抗打工事を実施していき、これも整備し終えた。(復興期成会記録)

昭和四十五年六月、九州北部一帯は、梅雨期が水びき降雨量が近年になく多

文化財についての考え

松 子

の概要をうけ、土砂・落下防止のために、崖下の山裾に沿ってコンクリート擁壁を造り、その上に、鋼材フェンスを張懸した防護壁を構築した。昭和四十五年、第七管区海上保安部も、沖ノ島において、船舶標識整備を行なう。船舶への導燈新設し、燈台遠隔監視強化のため電源室の建設をし、島内借地整理。(庶務書類・沖ノ島日誌)

昭和四十七年七月、ある程度土砂が止まり起つていたが、再び集中豪雨に合い、岩石・土砂の多量流失をみる。旧社務所の高台である「おたか」は、激げしい地入り現象にて崩壊し、原形が大幅に変容した。他の箇所では、先年施行した諸工事も、構築を終えた防護フェンスに守られ、災害は最小限に食い止めたことが出来た。(沖ノ島日誌・復興記録)

山腹の傾斜地には、島内に自生している草類の種播(こぼら)の移植による土留工事を完了し、燈台遠隔監視強化のため電源室の建設をし、島内借地整理。(庶務書類・沖ノ島日誌)

昭和五十四年三月三日、沖津宮新設社務所が、木造切妻造りで港内中央部に完成し、原形をこのままの状態で、保安庁職員の仕事も委嘱され、島内全体的に維持させていくかを、調査研究の課題として渡島にて行なう。すでに昭和四十八年六月に、沖津宮・辺津宮間の業務無線を設置し、七月より、固定局として社務所間の無線ひとも宗像郡考古学散歩り、全すべての業務は、昔(石井忠氏寄稿)は終了しない。(沖ノ島日誌・期り、同氏寄稿の「玄海沿岸地名探訪」の連載を予定し、ここにでもなお、生じています。

読者の皆様、御期待下さい。

宗像大社辺津宮境内図

